

透湿防水シートの「JISA6111」が改訂され、耐久試験項目として、30年相当、50年相当の劣化促進試験項目が追加されました。

これまでの耐久試験項目は10年相当まででしたが、更なる長期耐久性が求められることになり、30年相当(耐久性区分Ⅱ※)、50年相当(耐久性区分Ⅲ※)の試験項目が追加されました。

※耐久性区分については、下記表の加熱処理条件を参照ください。

商品詳細

■JIS A 6111:2016 透湿防水シート 物性規格表

| 性能項目 | 評価項目 | 単位 | 外壁用 | 外壁用 |
|-----------|----------|-------------------------|------------------|------------------|
| | | | 透湿防水シートA | 透湿防水シートB |
| 透湿抵抗 | | m ² ・s・Pa/μg | 0.19以下 | 0.13以下 |
| 強度 | 引張強さ | N | 縦、横とも100以上 | 縦、横とも100以上 |
| | つづり針保持強さ | N | 縦、横とも27以上 | 縦、横とも27以上 |
| 発火性 | | — | 発火しない。 | 発火しない。 |
| 防水性 | 水圧 | kPa | 10以上 | 10以上 |
| | 水圧 | kPa | 8以上 | 8以上 |
| 耐久性※1 | 引張強度残存率 | % | 縦、横とも初期値の残存率50以上 | 縦、横とも初期値の残存率50以上 |
| | 収縮率 | % | 1.5以下 | 1.5以下 |
| 防風性(通過時間) | | s | 10以上 | 10以上 |

※1 耐久性試験の加熱処理条件には、右表の6種類があります。

■加熱処理条件

| 記号 | 加熱処理条件 | | 備考 |
|-------|--------|------|-------|
| | 試験温度 | 試験期間 | |
| I-1 | 90℃±2℃ | 7週間 | 10年相当 |
| II-1 | | 17週間 | 30年相当 |
| III-1 | | 26週間 | 50年相当 |
| I-2 | 80℃±2℃ | 14週間 | 10年相当 |
| II-2 | | 34週間 | 30年相当 |
| III-2 | | 52週間 | 50年相当 |

⚠注意 保管・施工時のご注意

- スーパーエアテックスは壁用です。
- スーパーエアテックスは屋根用防水紙には使用しないでください。(屋根防水には「遮熱ルーフエアテックス」をご使用ください。)
- フクビ透湿防水シート施工説明書ならびに日本窯業外装材協会発行の技術資料に従って施工してください。
- 直射日光の当たる場所に放置しないでください。
- スーパーエアテックス施工後は60日以内に外装材施工を終了してください。**
- 透湿防水シートとしてのみ使用し、外装材とシートとの間に必ず通気層を設けてください。
- 印刷面が屋外側になるように施工してください。
- 現場にて小巻作業を行なう場合は、直接地面・道路等に広げずに、シート巻芯にシャフト等を通して巻き戻してください。(小巻時にシートが引きずられると、シート表面に穴があく恐れがあります。)
- 柱や土台など構造材に防腐・防蟻剤を使用する場合は、スーパーエアテックスの施工前に行ない、完全に乾燥してからシートを施工してください。
- 防腐・防蟻処理した通気胴縁は使用しないでください。**(防腐・防蟻処理した通気胴縁は、雨水がかかると薬剤成分が流れ出すものがあり、透湿防水シートの防水性能を低下させるおそれがあります。)
- 火及び高熱によって溶けたり燃えたりすることがありますので、火や高熱物を近づけないでください。
- 防水テープはスーパーエアテックスと接着相性のよいアクリル面と下地の不陸に強いブチルゴム面を併せもつハイブリット防水テープをお勧めします。(P.137参照)
- 製品に継ぎ目がある場合がございますが、機能上問題ございません。
- シート表面に防水テープを貼ったら剥がさないでください。
- シート単体で防水を保証するものではありません。施工後に降雨が予想される場合は濡れないように養生をお願い致します。
- 外装材施工前に、かなりの降水がある場合、シートを留め付けているタッカーの穴から雨水が侵入し、下地等が濡れる恐れがあります。通常、シートには透湿性があるため、天候が回復後すぐに乾燥し、そのまま問題ありませんが、かなりの降水量が予想される場合は必要に応じて、養生シート等で覆うなど雨水があまりかからない処置をしてください。
- 当社製品の裏面に直接ウレタン吹き付けをしないでください。(シート裏面に直接吹き付けると、透湿防水シートの性能・品質に影響を及ぼす恐れがあり、また外壁通気工法の通気層を阻害する恐れがあります。)